大成功の市民オペラ

～皆さんからのメッセージ～

指揮者の井上道義さんから

昔から、それもものすごく昔から「芸術」というものにはうさん臭さが付きまとってきた。よく何か別の意味付けの勲章のように利用されてきた。

私はゲイジュツというのはその人間の持つ存在理由、生まれたこと、生きていることを賛美すること、またはなんとか賛美できるようになるように戦うことの答案が芸術だと思っている。

「創作」の創という字はそこに存在したあかしを表現したくなる人間の気持ちのことで、時には名所旧跡の柱や牢屋の壁に、他人の気持ちも顧みず名を刻むという行動に走りさえする。パリの真冬の下町舞台のオペラの名作は、確かにどこから切って見ても「白石でなければできない方法」で、多くの人々の長年の蓄積と、未来への希望をつなぐことに成功したまれな出来事だった。そして何にも利用されなかった!!そこがすごい!!芸術をやった!!10年後にはきっと神話になっているだろう。

演出と装置・衣装デザインの日比野克彦さんから

よかった！よかった！参加したみなさん！ほんとうにお疲れ様でした。そしてありがとうございました。

いい舞台でした。特に2幕の市民が大勢参加するところは、素敵なシーンになりました。こんな舞台は世界中何処探してもありえない！これはほんと市民の長い長い時間をかけてせっせと作った舞台だからこそ成せることだと思います！

ひとつひとつに想いがこもった衣装、小道具、美術、そして本番での舞台転換、そして歌声は白石市民のオペラの成功の真髄であったことは誰の目から見ても明白でありました。ほんとうに素敵な時間を過ごさせていただきましてありがとうございました。また白石に来たときには声をかけてください。

芸術監督の三枝成彰さんから

本当にお疲れ様でした。

日比野さんのオペラ演出も初めてなら、白石市で市民オペラというのも初めて。だが、とてもそうとは思えない程、とても素晴らしい舞台だったと思います。

そして何よりも、ボランティアで参加していただいた市民の皆さんのパワーと想像力に驚きました。新聞紙で衣装を作るというアイディアも、市民の皆さんの作る衣装が日比野さんの想像を超えて、さらに素晴らしいものに変わっていったと思います。それを引き出した日比野さんの情熱と、答えた市民の皆さんの情熱に乾杯!!

▲終演後のカーテンコールでは、出演者に加え、ボランティアスタッフの皆さんも舞台に立ちました。

実行委員で合唱担当、ソリストとしても出演した佐々木隆行さんから

舞台に上がった人が100人。ボランティアスタッフとして関わった人が300人。人口4万人のまちでこの数は、すごい比率だと思います。初めての市民オペラということで、苦労した点もありましたが、参加した市民それぞれが時間を捻出し、それなりの成果を上げることができ、苦労したかいがあったと思います。行政と市民もうまく連携することができたと思います。

今回の成果を生かし、市民が参集してできるようなものを、もう1回やればと思います。

実行委員で小道具担当の中こづえさんから

日比野氏演出の市民オペラにおいて、必要とされ、生かされる小道具とはどういう物であろうか、と考えながらの小道具づくりと小道具集めでした。

子どもたちの雪の絵、大工さんが築いた建築物（舞台）、立ちげいこの中でやっと具体的に見えてきて本番間際までかかってそろった小道具たち、発想豊かな小道具仲間、オペラに多大なエネルギーを注ぐ人々、そして完成したオペラ、これらに出会えたことはとても貴重な体験でした。

実行委員で衣装担当の山内佳江さんから

世界中で一番好きな故郷、白石に「祭り」があればと常日ごろ思っていました。この市民オペラは、まさに神様が授けてくださった私の「祭り」でした。衣装や装置作りは、ねぶた作り。本番では、ハネトになるんだと日比野さんに話しました。その時、公演後お前は何をするんだと問われました。今は、このオペラで芽生えた市民の情熱、きずなを育てていくことに関わっていければ幸せだなぁと感じています。

私自身がこのオペラに関わった人々にたくさん育てていただきました。感謝申し上げます。そしてまた、これから始まりです。

実行委員の三浦敦子さんから

こんなに楽しい、すばらしい時を味わえて、ボランティアっていいなあと思いました。

いろんな市民の方と巡り会えたのも楽しかったことの一つ。市民の中に力がある人がいっぱいいるということが分かりました。毎回でなくても、その人たちが参加しやすく、途中でも加われるところで加わって活動する、それがボランティアなんだよとフォローをしたつもりです。

衣装ボランティアの大原美恵子さんから

布地で作るものと思い参加した衣装作りの初日、たくさんの新聞紙とテープ、古着などが用意され、本当にオペラの衣装が作れるのか不思議な感じがしたものです。

衣装協力の方の指導で、新聞紙にテープをはることから始まりました。慣れない作業に苦心を重ねアイディアを出し合い、多くの時間を費やしてボランティアスタッフが少なかったので、合唱の皆さんがそれぞれを仕上げました。

古いワンピースが優雅なドレスに、作業着は格好よい紳士服に、色あせたパジャマは、可愛いい子供服に、学生服は立派な楽隊の衣装に、麦わら帽子は花かざりやリボンをつけて素敵に生まれ変わったのです。ソリストの衣装は日比野氏がデザインし、印刷前の白い新聞紙でボランティアが仕上げました。

出演者が衣装（着ると非常に暑い）をつけ、楽しげに舞台に立ち照明に美しく映える様子に深く感動しました。

参加された市民の皆さん、本当にご苦労さまでした

舞台に上がった方、舞台裏で支えてくれた方、みんなが最高の舞台で最高のパフォーマンスを披露してくれました。

市民の皆さんとともに作り上げた公演の成功は、まさに現在市が進めている「市民と行政のパートナーシップによるくらし日本一のまちづくり」の芸術文化面での契機となったと思います。

今回は「第1幕」、いつの日かまた、市民オペラ第2幕の幕を開けようという気運が高まることを期待しています。

実行委員の皆さんやボランティアとして参加してくれた大勢の市民の皆さん、本当にご苦労さまでした。